

少年少女

低い堤の間に川は居た
僕たちはそこに小舟を静かに漕いでいた
彼女は両手を後ろについて体を支え
僕は彼女の瞳を見つめていた
まるでそれが羅針盤であるかのように

こんな小舟で浮んでいると
ずい分と川面が間近で
水がやわらかい液体であることが
睡蓮の花が決して流れ去らないことが
ずい分と間近に見えるのですね
そして水面はずい分となめらかです

低い堤の上に、あそこに犬が尻尾しっぽを振るのが
なんと遠く高く見上げるほどか
そしてこの水上は穏やかです

僕は川面のあまりの静態に
ゆらゆら揺れる水の万華鏡の反射に
片目をつぶった川のいたずらに
あやうく催眠をかけられるところだったので
ゆっくりと岸边に漕ぎ寄せた

あぶなっかしく、僕たちは岸に飛び移る
僕は彼女の手をいきなり取って
いっさんに堤を駆け上がる

ああ、何と何処までまっ平らだ
ああ、何と何処まで茶色い畑だ
広さというのは何という威力だ
僕はハアハア言いながら
片手でずっと遠くを指さす

あれが教会、あれが学校
そして小高い丘の上、緑の屋根が

あれが、あれが僕の家うちです

(1982.4.7)